

Title	The ashi-bune, or The reed-canoe., by Shinji Nishimura, Tokyo, 1925.
Sub Title	
Author	松本, 芳夫(Matsumoto, Yoshio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1925
Jtitle	史学 Vol.4, No.3 (1925. 8) ,p.143(455)- 143(455)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19250800-0143

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

The Ashi-Bune, or The Reed-Canoe.

by Shinji Nishimura, Tokyo, 1925.

海洋民族である吾々の歴史が、海洋を度外視して理解することのできないのはいふまでもない。民族の渡來も文化の傳來もすべて海を越えてなされたのであつた。さうしてその渡來の経路の研究が極めて重大なる問題であるとともに、その渡來の方法或は機關の研究がまたすくなく重要である。こゝに紹介せんとする本書の著者西村教授は日本古代船舶の唯一の研究者であつて、すでに苦心になれる同問題の書を毎卷英文にて刊行され、本書はその第四冊として最近にされたる葦船の研究である。

葦船はわが古典の神話にあらはれるのであるが、しかし神話においてはその構造も、用途も、起原も甚だ明確を缺くのである。それ故著者はまづ今日江戸川における竹筏、及びかつて發掘されたる銅鐸面に刻まれたる葦船の繪の人類學上、考古學上の研究から始め、殊に後者が南支那の古代文化と密接の關係があることから推論して、日本の或る地方において古代の印度支那の所謂算船のごとき葦船がかつて用ゐられたことをのべ、それより朝鮮、支那、臺灣、トンキン、スマトラ、ペルシヤ、古代アッシリヤ、エジプト、オウストラリヤとタスマニヤ、アメリカ大陸のカリフォ

ルニヤとペルーにおける葦船を研究して、それが古代エジプトのパピルス船といふ共同祖先から由來したことをのべ、この葦船の分布によつて古代文明がエジプト印度、インドネシヤ、及びオセアニヤを経てアメリカに及んだといふ説に賛し、さうして日本の筏の中、日本の筏が文化移動の北方系に屬し、葦船がその南方系に屬することをのべ、最後に文化の獨立發生説を駁して文化の接觸發生説を力説してゐる。この問題は古代文化の研究には特に重要であるとともに、その決定の頗るむづかしいものであるが、吾々はむしろ兩者の場合のあり得ることを信ずるものである。たゞ葦船がアジヤ大陸からアメリカ大陸に移動したことを主張するには、すくなくともその中間の飛石となれるミクロネシヤ、メラネシヤ、及びポリネシヤ諸島においてそれが實際に用ゐられてゐるか、或は用ゐられた形跡があるかどうかを論證するだけの用意が必要ではなからうか？ それほどにかく本書は文化の發達に最も密接の關係を有する船舶の研究であるから、吾々海洋民族にとつては殊に興味があり、また古代文化について多くの啓をうけるのである。(松本芳夫)

國體新論

(黑板勝美著
博文堂發行)

我が國の現状を觀た時我々の何よりも強く感ずるのは國民思想の混亂頹敗、國民精神の不安焦燥ではあるまいか。世界大戰の結果として起つた思想界の動搖は我が國にも及び國民思想を壓迫し